

2. <言語問題>と言語学者

(1) アスコリ

— <創造的合意>と<自然的選択>

フィレンツェ部会の報告を見たマンゾーニ  
 の反応は、「われわれは、辞書の材料につい  
 て、そして、それを作成する方法について、  
 対蹠点にいる」というものであり、文部大臣  
 グロリオに、委員長を辞任したい旨の書簡を

おくる。けれども、グロリオは、『報告』で  
 のべられたマンザーニの考えをあくまで支持  
 して、この申し出をこじわったばかりか、マ  
 ンザーニの意図を実現するべく、1868年10月  
 24日に、「フィレンツェ慣用の言語の辞書を  
 作成する任を負う」委員会を設置し、みずか  
 ら委員長を務めた。そして、二年後、18  
 70年に、この委員会による最初の成果、『フ  
 ィレンツェ慣用によるイタリア語新辞典 *Novo  
 vocabolario della lingua italiana secondo l'uso di Firen-*

ze』第一巻が、刊行されるのである。  
 この辞書は、イタリア言語統一のための規  
 範をあたえる手段という性格をもっていた。  
 それは、マンザーニが『報告』の末尾でのべ  
 た、教育現場での使用を、目的としていたの  
 である。第一巻につけられた、作成者のひと  
 りであるジョルジーニによる序文は、一方で  
 は、クルスカの純粹主義への、他方では、モ  
 ンティ、ペルティカリらの、いわゆる *lingua  
 italiana* へのはげしい攻撃をふくみ、

マンゾーニ主義への無条件の絶対的帰依を表  
 明していた。そして、この辞書の画一的フィ  
 レンツェ主義は、その題名を見ただけで、あ  
 ますところなく明らかになる。題名の最初の  
 単語 *novus* がそれである。伝統的イタリヤ語で  
 は — これはいまでもおなじだが — ラテ  
 ン語の短母音 *o* は、開音節で二重母音化して  
*uo* となっていたが、この辞書では、フィレン  
 ツェの現代慣用にひたすら忠実に、開いた *o*  
 の形態だけが、採用されたのである (*novus, bo-*

*no, scola* etc.)。

この『新辞典』は、マンゾーニ主義の最初  
 の実践的成果であって、文部省をうしろだて  
 にして、その立場のまたとない補強手段とな  
 った。しかし、その反面、そこにしめされた  
 あからさまなフィレンツェ中心主義は、反マ  
 ンゾーニ派のかっこうの攻撃目標となった。  
 そうした批判者のうちのひとりに、言語学者  
 アスコリがいたのである。

グラツィアディオ・イザリア・アスコリは、  
 1829年  
 当時オーストリア領であった、フリウーリ地  
 方の一都市ゴリツィアのユダヤ人社会に生ま  
 れた。この地域は、フリウーリ語、ヴェネツ  
 ィア語、スロヴェニア語、社会的上層部での  
 ドイツ語、イタリア語 — さらにアスコリ自  
 身の環境としてはヘブライ語がある — など  
 複数の言語が、たがいにせめぎあいながら共  
 存しており、言語への鋭敏な感性と、言語ど  
 うしの比較の意識をはぐくむには、またとな

い地であった。アスコリは、すでに16才のと  
 き、『フリウーリ語とルーマニア語との親縁  
 性について』という小冊子を発表しているほ  
 どである。のちに、マンゾーニの単一言語主  
 義に、アスコリが反発をおぼえたのは、さか  
 のぼれば、かれの言語意識の根底が、こうし  
 た複数言語状況のなかで形成されたというこ  
 とに、遠因があるのかもしれない。  
 1849年の第一次解放戦争の敗北ののち、ア  
 スコリは、1852年に、北イタリアにおもむき

とくにロンバルディの知識人たちと接触をもちながら、『東方言語研究』という雑誌の創刊につとめる(第一巻は1854年)。すでに以前から、アスコリは、ホッアヤフンボルトの著作に心酔していたが、ミラノでは、1839年から、ビオンデッリが、カッタネオ編集の雑誌「Politecnico」をつうじて、ドイツの印欧比較言語学の紹介をおこなっていた。アスコリは、ビオンデッリにずいぶん批判的だったが、こうした環境のなかで、独学ではあった

がすでに十分な言語学的素養を身につけていたアスコリは、印欧比較言語学の研究をおしすすめ、しだいに独自の「基層 *sostrato*」理論を確立していくのである。そして、統一イタリア王国が成立した1861年、アスコリは、ミラノ科学文芸アカデミーの比較言語学教授に任命される。

べつに、アスコリの伝記をのべようというのではない。アスコリのマンガーニ批判の背後には、ロンバルディア啓蒙主義の思想潮流

(1) Timpanaro, Sebastiano, Carlo Cattaneo e Graziadio Ascoli,  
in *Classicismo e illuminismo nell'Ottocento italiano*, Pisa, 1969<sup>2</sup>,  
p. 229-357.

があることを。見のがすわけにはいかないからである。とくに、戦闘的啓蒙主義者カッタネオは、言語問題への対応のみならず、基層概念を中心とした言語理論の面においても、アスコリにいちじるしい影響をおよぼしたことが、論じられている。いわば、アスコリは、言語の italianità 確立をめざすロンバルディ 啓蒙主義 したがつて、クルスカ的立場にもとづこうと、マンザーニ的立場にもとづこうと、フィレンツェ語の優位

性を説く立場は、否定される — の言語思想を、たしかに言語学的知識にもとづきながら総合するという役目をはたしたのである。

1870年ごろから、アスコリの関心は、比較言語学から、イタリア言語学、方言学の領域へと移動していくが、1873年にアスコリが創刊した『イタリア言語学紀要 Archivio glottologico italiano』は、はっきりとその方向づけをさだめたものである。ティンパナロの論ずるところでは、この転換がおこったのは、当時のデ

(1) ibid. p. 311-312

イーツヤトブラーによるロマンス言語学の興  
 隆に刺激されたというよりも、自国イタリア  
 の諸言語の歴史的形成を研究する学派をつく  
 ることで、イタリア方言学を国民の文化生活  
 のなかに統合しようとしたからであるという  
 ことだ。<sup>(1)</sup> <イタリア言語学>という研究領域  
 を明確化することで、近代科学にもとづく国  
 民文化の形成に寄与しようとして、アスコリは望  
 んだ。これは、十分説得力をもつ推論である。  
 なぜなら、この『イタリア言語学紀要』第一

(1) Ascoli, Graziadio Isaia, Il Proemio all' « Archivio glottologico italiano », in Scritti sulla questione della lingua, a cura di Corrado Grassi, Torino, 1975

巻の冒頭をかざる「序文 Proemio」<sup>(1)</sup>は、言語学  
 や方言学について論じたものではなく、あげ  
 て、マンゾーニ主義批判にページをささげて  
 いるからだ。それは、イタリアの文化状況が  
 何世紀にもわたってほらみっげけてきたく言  
 語問題への、言語学者アスコリの〈介入〉  
 だったのである。

アスコリのこの「序文」の内容を決定づけ  
 る、直接のきっかけとなったのは、上でふれ

た。グロリオたちによる『新辞典』の刊行で  
あつた。言語学者の客観的な眼から見たら、  
この辞書のフィレンツェ規範主義は、とても  
がまんできるものではなかったのだらう。し  
かし、これはきっかけにすぎない。アスコリ  
は、『新辞典』をささえるマンゾーニ主義の  
理論的根拠にまでわけいり、そこにきびしい  
批判をそもぐのであり、さらには、イタリア  
の社会文化状況についての透徹した認識と診  
断にまでいきつくのである。アスコリのマン

ゾーニ主義批判は、フィレンツェ文学者たち  
の文学的基準からのマンゾーニへの反発など  
とは、次元のことなる場からの発言なのであ  
り、ほんとうの意味で、マンゾーニの理論に  
拮抗しうるゆいいつのアンチ・テーゼなので  
ある。  
アスコリは、まず論のはじめに、題名の no  
vo に象徴的にあらわれている、『新辞典』の  
画一的フィレンツェ主義に異議を申し立てる。  
イタリア語の uò と ó とが、それぞれ、ラテン



(1) *ibid.* p. 8.

語のアクセントのおかれる開音節の *o* と *o* と  
 の短長の区別に対応しているのは、「歴史的  
 現象」である。だから、そうするひつようも  
 ないのに、「そのような区別を廃そうとする  
 こころみ」は、「ことばの実際の面にさえ明  
 白な被害」をもたらすという声があがるのは  
 当然であり、それには十分な歴史的根拠があ  
 るのだ。かつてのフィレンツェ語は、*uo* をも  
 っており、イタリア全体に広まったときも、  
 それが保持された。だからこそ、「何世紀も

(1) *ibid.* p. 9. (2) *ibid.*

このかた、イタリア人であろうと、外国人で  
 であろうと、イタリア文化の言語を知っていた  
 者は……この *uo* をつねに書き、発音さえし  
 たのである」。(1) こんにち、フィレンツェ語慣用  
 では廃されているにせよ、「この部分におい  
 て、確固として一体である言語は、それが生  
 まれてた地にあつた重要な性格も、保たねば  
 ならない。なぜなら、動詞活用において、ア  
 クセントのおかれる場所に依じて、*uo* と *o* が  
 交替しあうのであり (*muōvo, moviāmo* < *movere*)

(1) *ibid.*

これは「イタリア語の内的、文法的運動にお  
けるもっとも顕著な部分」だからである。「  
これほど確固として、民衆の深奥からこれほ  
ど自発的にわきでたことば」の固有性を、理屈  
っぽい文法家が、統一 (*unita*) や人民 (*popolo*) の  
名において、廃したり削減したりしようと考  
えているなどと信ずべきだろうか」。

(1)

アスコリが、この *uo* にことよせて語ってい  
るのは、こういうことだ。言語は、社会、文  
化と結びついて発展してきた歴史的形作物で

ある。イタリア語の現在の「内的構造」は、  
その歴史的形成力の所産なのであるから、人  
為的手段でそくざに変更などはできない。「  
新辞典」は、言語の歴史的形成力を無視して、  
イタリア語を「ゼロ地点」にまでひきずりお  
ろしてしまふのである。

すでに、マンゾーニとアスコリとの対立点  
は、ニニに、あらわれている。マンゾーニは、  
そのく慣用フの理論からもわかるように、言  
語を共時的機能性の観点からしかとらえない。

それにたいし、アスコリは、言語の歴史性の次元を強調するのである。

こうして、アスコリは、『新辞典』をささえるマンゾーニ主義の批判的検討にうつる。

アスコリはこう言う。『新辞典』は、学問的要求ではなく、「大いなる実践的、国民的関心」にもとづいている。それは、「イタリアにひとつの言語をあたえる」ということだ。

その「国語」は、ある都市の生きた慣用でなく、その都市が、「国民全体を平

準化する道具」となるべきだとマンゾーニ派は言う。この言語統一のモデルは、フランスにある。パリのことばがフランスを統一したように、フィレンツェのことばが、イタリアを統一しなければならぬというのである。

しかし、このような平行関係は、なりたちうるのだろうか。イタリアに言語の統一性がないののは、たしかになぜすべきだが、そのまえに、「なぜ、ほかの国は、このきわめてすぐれた言語の安定性をもっているのか、なぜ、

(1) ibid. p. 11

それがイタリアには欠けているのかという深  
い理由<sup>(1)</sup>を、あきらかにしなければならぬ。  
とアスコリは言う。

まず、アスコリは、マンゾーニ派が至上の  
モデルと考える。フランスの場合を検討する。

たしかに、パリは、フランスのゆいいつの中  
心であり、言語の統一性をささえる基軸であ  
るが、それは、言語だけでなく、あらゆる文  
化と精神活動が、パリにみなもとをおき、そ  
こから地方へ伝わって行くからである。「フ

(1) ibid. p. 12.

ランスは、この都市[パリ]に、その思考を  
吸収してしまいう統一性をもっているので、当  
然のことながら、その精神においてもそうであ  
る。パリにあわせて、学び、働くだけでは  
ない。その首都の望むがままに、感動し、泣  
き、笑うのだ。<sup>(1)</sup>

少々誇張した言いかたではあるけれど、そ  
れは、マンゾーニ派がひたすら称讃するフラ  
ンスの絶対的単一主義を、アスコリが批判的  
なまなざしでながめているからなのである。

なぜなら、「そうしてステレオタイプがっく  
 られてしまうと、思考を麻痺させ、自発的な  
 ものを、ほとんど自動的なものにしてしま<sup>(1)</sup>  
 からだ。辞書が、どこでも通用するみごとな  
 ことばを身えれば身えるほど、「並の精神の  
 ひとたち」は、ますます考えることが少なく  
 なる。こうして、学士号をとったわけでもな  
 い女性でも、「食べものを入れるための切り  
 ぐち」と言えはいいものを、「栄養摂取の要  
 求により必要とされる外科切開」と気軽に口

にだせるようになるのである。  
 これは、言語、そして文化全体の単一規範  
 主義にたいする、アスコリの容赦のない批判  
 である。だけれども、それに依拠しさえすれば  
 安心できるような、ただひとつのモデルをも  
 つことで、文化は内発的創造力をうしない。  
 「自動的なもの」の形式的反復におちいる危  
 険性がある、というのがアスコリの見方だ。  
 このように、フランスの文化モデルを批判す  
 ることは、それに全面的によりかかったマッ

ゾーニ主義への核心的批判ともなるのは明らか  
 かどうか。

アスコリは、言語と文化とを、けっして切り  
 りはなそうとはしない。この点もマンゾーニ  
 主義への批判をみちびきだすことになるのだ  
 が、それはあとまわしにして、ここで注意し  
 なくてはならないのは、アスコリが「並のひ  
 と (il mediocre)」と言うとき、そこに感情的価  
 値はまったくふくまれていないということだ。  
 「並のひとこそ、[偉大なひとにくらべて]

(1) *ibid.* p. 12.

つねにより重要で決定的である」とアスコリ  
 は言う。<sup>(1)</sup> というのは、文化を普及し、組織化  
 し、全体に活力をあたえつづけるのは、とき  
 たまほつりとあらわれる大知識人ではなく、  
 それら「並のひと」であるからだ。これは、  
 く中間的知識人のはたす役割の重要性を説  
 いた、グラムシを思いおこさせる知識社会学  
 的テーマなのであり、アスコリは、あとでこ  
 の観点を、イタリア文化にあてはめてみるこ  
 とになるだろう。

(1) ibid. p. 14

このように、アスコリは、フランス的モデルには一定の批判をさしはさむのだが、それにくらべ、全面的な称賛をあたえてやまないのが、ドイツである。ドイツは、フランスに おけるパリの ような、ひとつの中心的都市を もたず、政治的社会的にも分裂した状況にあ った。しかし、「その方言が、数かぎりなく 多様であるにもかかわらず、これまで地にひ びきわたったことがないほどの、確固として 強力なことばの統一性を手にしている」。こう

(1)

して、ドイツは、イタリアと似たような政治 的分裂状態にありながら、なぜ、イタリアが もちえていない言語の統一性をかちえたのか という問題に、アスコリの考察は集中してい くのである。

もちろん、ドイツ語の統一性とは、ドイツ の各地でおなじことばが話されているという 意味ではない。そうではなく、「ドイツでは、 だれも言語の揺籃地をあがめたり、見さだめ ようとしたりはしない」のであり、「どこか

(1) *ibid.* p. 15.

特権的な生きた言語の泉で、文学に洗礼を授けなおそうという必要も欲求も感じない」の(1)である。アスコリの見方では、ドイツでは、各地にさまざまの方言が話されていながら、  
 <国民文化>の次元では、言語が統一性をもち、それは、どの特定の地方にも限定されず、どの方言とも同一視されえないし、そうする必要もないということなのだ。そのような意味での言語の統一性の形成に寄与したものと  
 して、アスコリは、まづルター訳聖書をあげ

(1) *ibid.*

る。「その奇蹟(1)とも言える聖書の翻記は、信仰の統一性をこわしたか、国民の統一性を創りあげた。」(1)たしかに、「ドイツ精神の進歩」は、それ以後、断続があり、遅々としたもので、「ドイツの堅固な知的市民的統一は、まったく現代のこと」である。「しかし、言語の統一は、きわめて堅固なものだ。それは、文化の進歩と国民感情の覚醒のエネルギーが無限の活動性と結びついたからである。-----なんらの物質的へだたりも、ドイツ人たちを



(1) ibid. p. 16.

もはや分けへだてなかった。かれらはみな、

実在しない都市の市民となったのだ<sup>(1)</sup>

つまり、ドイツ文化全体が、知的精神的統

合性をそなえたからこそ、言語の統一性が生

みだされたということだ。この点で、アスユ

リは、マンゾーニとちがって、書きことばの

はたす文化的役割を重視する。政治的社会的

分裂が存在する状況で、文化的統合性をかく

とくするためには、書きことばが不可欠の手

段であるのだが、そればかりではない。「何

(1) ibid. p. 17

百万人のひとびとが、ペンを活版にはたらか

せるときには、交流は、きわめて迅速に、複

雑に、高尚に、効果的になり、共通のもの

になった知識の集積は、おどろくべきほど、拡

大し、洗練され、強化されるので、交流がお

こなわれるひとびとの集団や連合は、思考の

領域にまで高められる<sup>(1)</sup>。だから、アスユリが

書きことばの独自の機能を強調したとしても、

それは、<sup>マンゾーニが批判したような</sup>少数者の文字をつうじた文化の独占

を意味しているのではない。まったくぎやく

に、多数のひとびとが、書きことばをつうじ  
て広範な文化活動に参加することで、それま  
でにない高い次元での精神的共同性を創造す  
ることができるとアスコリは言いたいのだ。

そのありさまをアスコリはこう描く。

「学校で、出版で、文化的ことばにはぐく  
まれた社会活動全体で、こうして、言語の強  
烈な生命がゆりうごかされる。そこでは、ひ  
とひとりひとりの提案、創造、発掘、同意、拒否、  
改革、普及、使用が、たえまのないできごと

と結果となるので、きわめて高い領域で、創  
造的合意の過程が持続し、再生産される。そ  
こでは、いかなる土地のことばも、身をもた  
げ、強められ、すがたをかえる<sup>(1)</sup>

これは、もはや、現実のドイツのすがたを  
述べたものというよりは、アスコリがみずか  
ら理想とする社会と文化のありかたを語って  
いると見たほうがいいだろう。マンゾーニに  
おけるフランスがそうであったように、アス  
コリは、ドイツにたくして、理念的世界像を

えがいたとも言える。ただし、この引用文の  
 最後の文に注意されたい。アスコリにとって  
 このような文化的統合性が達成されたとき、  
 それぞれの地方のことば、方言は、そこに参  
 与し、合意のかくどくに貢献するが、かなら  
 ずやその過程で、なんらかの変容をとげずに  
 はいないし、またそうあるのが自然なありか  
 たであるということだ。  
 とりあえず、つぎのことは確かである。ア  
 スコリが共感をもつてながめる言語統一のモ

デルは、フランス的単一主義ではなく、ドイ  
 ツ的多元主義であるということ。そして、そ  
 れは、〈国民〉全体が、〈創造的合意〉に参  
 与することで生まれる文化的統合性にもとづ  
 くものである、ということだ。  
 それでは、今のイタリアはどうなのか。こ  
 となる性格のものであるとはいえ、フランス  
 とドイツでなしとげられた言語統一が、なぜ  
 いままでイタリアでは不可能であったのか、  
 という考察に、アスコリはむかっっていく。こ

れは、マンゾーニ主義にはほとんど見られな  
 かった歴史的次元の考察である。そして、ア  
 スコリは、ドイツ的モデルがもしあてはまる  
 としたらという仮説をたてて、イタリア語が  
 たどった道すべを、もういちどたどりなおし  
 てみるのである。

アスコリは、イタリア語が、1300年代トス  
 カナ文学の影響力によって、フィレンツェ性  
 を刻印されたことを認める。「フィレンツェ  
 のことばの音声型、形態型、統辞型は、ダン

(1) *ibid.* p. 19.

テ・アリギエリの偉大なちからによって、イ  
 タリアの思考とわかちがたくむすびついたの  
 だ<sup>(1)</sup>この点は、アスコリが、モンティヤベル  
 テイカリと決定的にちがうところであり、後  
 者は、俗語がその出発当初からくイタリア性  
 を帯びていたと主張したのだが、それにはい  
 し、アスコリは、そのようなイタリア性は、  
 フィレンツェ語が各地に広まり、そこに根が  
 いていくにつれて、しだいに獲得されたもの  
 だと考える。「その〔フィレンツェ語の〕型

(1) *ibid.*

に違反せず、また、その土地のものであれ、  
 国民的知性の高いなる対話のなかで適切であ  
 り好ましいとされたものならなんであれ、も  
 とのフィレンツェ語に属するものにおとらず、  
 あるいはそれにもまして、正当なものとみな  
 されて、そこに織りあわせられ、さらに、それ  
 をさまざまなやりかたで、わずかならざる変え  
 ていったであらう」。

(1)

このような把握は、〈基層〉理論をイタリ  
 アにあてはめたことから生まれたと見て、い

だらう。〈基層 *sostrato*〉としてのイタリア諸  
 言語に、〈上層 *superstato*〉としてのフィレンツ  
 ェ語がかぶさり、相互の接触、干渉、混淆に  
 よって、それぞれの側で言語変容がひきおこ  
 されるのである。この変容のなかで、固有フ  
 ィレンツェ語は、〈*lingua italiana*〉と言うべき  
 ものに生まれかわる、というのがアスコリの  
 見方だ。この歴史的視点からみても、イタリ  
 アにおけるフィレンツェ語の専一的優越性と  
 いう考えは、もはや支持できないものとなる

だらう。

だから、このアスコリの「序文」は、『新辞典』に象徴されるマンゾーニ主義へのはげしい批判をふくむのであるにせよ、状況への応対をせまられた言語政策的提言とだけみならずわけにはいかない。アスコリの態度は、みずからの言語理論、言語思想の内奥から生まれてきたのであり、それだからこそ、マンゾーニとアスコリとの対立は、認識論的次元にまでくわいていっているものとなったのである。

先を続ける。この < lingua italiana > の概念にたいして、マンゾーニは、それはたんなる語彙のよせあつめであって、< 一体性 > をもたないから、ほんとうの意味での言語とは見なせないと反駁したのであった。ところが、アスコリは、その形成過程には、一定の原理があったと考えるのである。たしかに、イタリヤのさまざまな言語から、いろいろな表現が導入され、おなじ意味をもつ単語や言いまわしが、あふれたかもしれない。「しかし、そ

(1) ibid. p. 20

の先見えのする治療法は、ひとえに自然的選

択のなかにあった。これこそ、いっでもどこ

でも、[社会のなかで]有力な活動がもたら

すものである。

(傍点原文イタリック) (1)

く自然的選択とはなにか。たとえば、く

指ぬきフをさす語は、フィレンツェ語では ane-

llo であるが、ほかのことばでは、ラテン語形

にさかのぼるような、\*digitale または \*digite-

llario という語をもっていたであろう。そこで

あるとき、たとえば、アレツツォの職人は、

(トスカナ地方の都市)

フィレンツェ語を学んでいたにせよ、anello

よりもふさわしいかたちとして、ditale とい

う語を用いたであろう。そして、かれの仕事

仲間のヴェネツィア人、ミラノ人、パレルモ

人は、それぞれの方言形、dexial, didā, jidi-

tali に、正当な理由をあたえたであろう。こ

うして、イタリア共通語では、フィレンツェ

語 anello は廃されることになる。これが、ア

スコリの言うく自然的選択である。それは、

構造言語学が言うような意味で、体系の不经

済性をとりのぞくために、言語そのものの本  
 性として備わった自動調節機能をさすのでは  
 ない。く自然的フとは、く自発的フと言いか  
 えてもよいのであって、まえもって計画され  
 ているわけではないが、ある歴史的時点で、  
 人間の知的意志が介入しておこる言語変化な  
 のである。「どの語を選ぶかは、習練の次元  
 で、つまり、----- [その現場の] 技術や制度  
 についての理論的、実践的区別の次元での活  
 動に依存する」のであり、それは「無為とは

(1) ibid. p. 20

反対のもの」なのだ。  
 (1)  
 こうして、く慣用フの共時的強制力を強調  
 するマンゾーニにたいして、アスコリは、社  
 会、文化、そして、そこにおける人間のく自  
 発性フと連動しての、言語の変動性の次元を  
 対置するのである。言語は、人間の知的活動  
 の所産とみなされる。アスコリの強調する、  
 言語のく文化性フは、社会におけるあらゆる  
 実践活動をつつみこむものとして理解しなけ  
 ればならない。ある意味で、言語においては、



「あらゆる者が知識人」(グラムシ)となる  
のである。

このあと、アスコリは、イタリア語がさま  
ざまな方言から表現をゆずりうけた面白い例  
をいくつかあげていくが、それを逐一追いか  
けるのはやめておく。だが、その一方、各地  
の方言の隔年によつてささえられて、国民的  
次元で形成されたイタリア語は、こんどは、  
それら方言にたいして、反作用をおよぼした  
であろう、とアスコリは考える。「国民の知

(1) *ibid.* p. 22.

装置のきわめて大きな変化は、それ自体をつ  
うじて、そして、人々の変わりゆく状況をつ  
うじて、ことばの次元にも大きな転換をもた  
らしたのであるう。こうして、家庭内のことば  
づかい、一地方の特殊語法(*idiotismi*)、さま  
ざり文句は、あらゆる種類の書きもののなかで  
そうでなかったときは、まったくちがうす  
がたをとったであろう。<sup>(1)</sup>  
しかし、そうはならなかった、とアスコリ  
は言いたいのだ。このく共通語の形成過程

は、あくまで、ドイツ的モデルがイタリアに  
 もあてはまるのなら、という想定のもとに描  
 かれている(だから、この部分のほとんどの  
 文では、条件法が用いられている)。イタリ  
 アでは、広範で活発な社会的文化活動が形成  
 されなかったため、言語と方言、上層  
 と基層とのあいだに、十全な<sup>動態的</sup>相互  
 作用が生まれえず、おたがいがそれぞれの世  
 界にとじこもったまま硬直化し、真の共通  
言語は、道なき道で、途絶してしまっただ、創造

アスコリは見なしている。じつは、このこと  
 が、アスコリの論でもっとも問題性をはらむ  
 <言語>と<方言>との関係性の議論にかか  
 りつつあるのである。  
 ある点では、アスコリは、マンゾーニとこ  
 となり、<言語>と<方言>との区別をして  
 いる。もちろん、言語学者アスコリが、それ  
 らふたつのあいだに、体系の質的差異がある  
 などと言うわけではない。そうではなく、<  
 言語>と<方言>とは、文化的ヘゲモニーの

(1) ibid. p. 24.

行使範囲にちがひがあるといふのである。正確にいえば、<国民>全体に理解されねばならないことば — 共通語 — と、ある限定された地域でしか通用しないことば — 特殊語法 (idiotismi) — との対立が、問題になつてゐる。アスコリによれば、「ひろい世界のまえで、おなじ国民のさまざまな集団が、<sup>ひとりの</sup>言語で語るとき、そこから、家族的な、あるいは郷土的な親密さの多くの部分をとりぞく」のは、話手の「自発性の理由」にもとづく。(1)

し、そのようなときに、あえてまじめさの欠けた、なれなれしい表現を用いたとしたら、かえつて、「正真正銘の<sup>(1)</sup>気どり」が生まれるといふのである。そのような意味での「気どり」が氾濫してゐるのが、イタリアの状況だとアスコリは言おうとしてゐるのだ。

アスコリは、たとえば、ウィルヘルム・フォン・フンボルトが、いかにそうした気取りをまぬがれており、その著作のなかに特殊語法のあとがないかを強調する。もちろん、ア

スコリは、「民衆的で生き生きとした特徴で  
ある特殊語法」を禁じようとしているのでは  
毛頭ない。そのような規範主義的態度は、は  
なからアスコリには無縁のものであるし、そ  
うした言語表現が、<sup>日常の</sup>話しことばではもちろん  
のこと、文学においてさえ、きわめて重要な  
要素であることを、認めているのである。け  
れども、フンボルトの著作は、「どこで文学  
のことばが終わり、どこで科学のことばが始  
まるか」を、知らせてくめるのだ、というの  
(1)

(1) ibid. p. 24.

である。  
アスコリの「方言」観に問題はあつた。一地  
方の特殊語法は、「よみがえった国民の幼年  
(idiotismi)  
時代、盲目的忘我の時代、記憶だけの時代」  
にあたり、近代的国民の思考が「反省」の世  
界にあるべきだとするなら、特殊語法は「本  
能」の世界にとどまっていると、アスコリは  
言う。ここには、アスコリのもつ、ある種の  
(1)  
近代主義、科学主義のあやうさが、あらわれ  
ている。フランス革命の言語政策を見ればわ

(1) De Mauro, Tullio. Idee e ricerche linguistiche nella cultura italiana, Bologna, 1980, p. 60

かるように、く方言がく理性以前の世界の表現であるという考えかたは、く子どもから大人へという一元的進化の図式を土台にして、近代国家が、理性的言語であるく国語を強制するための、かっこの理由づけになりうるのである。デ・マウロが指摘するよう

に、「アスコリにとって、方言から言語への移行は、非文化から文化への移行として描かれ、ひとつの文化的現実から別のそれへの移行としてはとらえられない」のである。

しかし、そうした批判されるべき問題点をふくみながら、その一方で、当時のイタリアの言語状況を背景に考えるなら、アスコリの問題設定の誠実さは、否定しがたいものがあるのも事実である。アスコリは、つぎのことを言いたいのだ。「近代的国民の思考は、おおくの部分が地方土着的なものではない広大な知識を糧としなければならないが、国民が多集团的で、遠心的なとき、その思考を統一的なことばで、いかにして表わすことができ

(1) Ascoli, G. I., op. cit., p. 24.

るかという点に、問題はかかっている<sup>(1)</sup>  
 アスコリは、なにも、く国語フイデオロギ  
 ーをふりかざして、方言の存在を否定しにか  
 かったわけではない。アスコリは、イタリア  
 の文化、社会状況全体に、きびしい批判の眼  
 をもってのぞんでおり、クルスカ的古典崇拜  
 による purismo と、狭隘な地方主義による idio-  
 tismo とは、たがいにささえあう補完的機能を  
 はたしていて、それらのあいだでひきさかれ  
 つづけたのが、イタリア文化の歴史であると

いう認識をもっていた。おのおのの地方のあ  
 いだの地理的断絶のみならず、く知識人フと  
く民衆フとの同盟の欠如という社会的断絶が  
 それにはあった。だから、アスコリは、方言  
 そのものの存在ではなく、なんらのく国民的  
ー人民的フ統合性がまったくないままに分裂  
 した社会状況、く言語フとく方言フとが、そ  
 のあいだに動態的相互作用をもたず、くふた  
つの世界フに凝固し、断絶した言語状況を批  
 判したかったのである。こうして、のちに見

るように、アスコリは、*idiotismo* にむけたものよりも、さらに一層きびしい批判を、イタリア文化の象徴としての *purismo* に浴びせかけるのである。

さらに、つねに頭においておかねばならぬのは、論敵マンゾーニ主義のことである。

すでに述べたように、マンゾーニは、イタリア全土の「方言」はじつは十全たる「言語」であるとの理由から、そのひとつであるフィレンツェ語をまるごと「国語」として採用し

「言語のおきかえ」をつうじて、言語統一をなしとげようとしたのであった。ところが、アスコリから見れば、マンゾーニ主義者が、言語のひな型として提供するフィレンツェ語は、決してそのままでは共通語になりえない「方言」なのである。フィレンツェ語に特有の *punto* の形容詞的用法 (*punto paura = poco paura*) は、ほかの地方には「同一の方言型」がまったく存在しない。また、これまでイタリア全体でうけいれてきた *diede, diventa* という「完

(1) *ibid.* p. 25.

全に歴史的な形態」が、なぜ、いまになって  
 フィレンツェでしか通用しない *dette, doventa*  
 の犠牲にならなければならないのか。「フィ  
 レンツェでは親密さであるものが、そのゆえ  
 イタリアでは気どったわざとらしさになるだ  
 ろう」とアスコリは言う。

さらに、アスコリは、く共通語への観点か  
 らのみならず、く方言への立場からも、く言  
 語のおきかえへという原理に反対した。すで  
 に見たようなく特殊語法への批判があるとはい

(1) *ibid.* p. 24.

え、アスコリは、「国民の知的活動を共通の  
 ものにするのに役立つ方言の最初の基礎」を  
 重視するのであり、さらに、マンゾーニ主義  
 が、その言語単一主義でもって同質化しよう  
 とした方言の多様性を擁護するにいたるので  
 ある(のちでふれる二言語併用についての議  
 論を参照)。だから、不思議なことに、く言  
 語へのく方言への区別を認めないマンゾー  
 ニ主義のほうが、温情主義 (*paternalismo*) 的で  
 あると同時に、抑圧的な役割をになってしま



うことになる。アスコリは、方言のなかにひそむ潜在的形成力を、国民的統合性へむけて発展させることで、共通語を実現しようとした。と言ったとしたら少し好意的にすぎるだろうか。

アスコリの困難な道は、つきのことにあった。マンザーニのように、多を一におまかえるのではなく、多の生きたちからをみとめつつ、そこから自然的選択と

創造的合意によって、あらたなく一を生み出すこと。マンザーニ的単一主義を拒否し、多元主義をとりつつ、集権的中心をひつようしない統合性を手に入れること、である。たしかにこれは困難な道であるが、しかし、ドイツは、長いあいだのねばりづよい文化活動によって、これをなしてげたのである。アスコリによれば、最大の問題は、イタリアにおいて、過去にも、現在にも、この道をおしひらくような文化状況が、まったく見あた

らないといふところにあつた。アスコリが、  
 これまでの「italianità」支持者たちと、一線  
 を画すのは、まさにこの点である。アスコリ  
 は、もはや、フィレンツェ主義に対抗して、  
 イタリア全土の知識人に理解される共通文化  
 語が存在することを指摘して、こと足れりと  
 はしない。むしろ、アスコリは、マンザーニ  
 とおなじく、現在、イタリアには真の意味で  
 の共通語がまったく存在してないといふ認  
 識にたつ。この両者は、近代的国民の共通語

を創出しなければならぬといふ意識をわか  
 ちもっていたとさえ言えるのだ(といふのは  
 そこに第三の敵、復古的純粹主義があつたか  
 らである)。ただ、アスコリは、マンザーニ  
 主義のような速効的、一面的な手段では、問  
 題は解決しないと見る。病根は、イタリア文  
 化のおくぶかい歴史の髓にまで達しているか  
 らである。  
 ことなるモデルをしめし、ことなる性格を  
 もつとはいへ、ドイツもフランスも、安定し

(1) ibid. p. 27

た共通語をもっている。しかし、「そのふたつの国で、ことばの統一性が広まっているのは、そのことばのなかに宿っている国民的知性の抗しがたい作用、思考の共通性のくめどもつきせぬちがらが、そのなかにあるからだ。

-----したがって、それらの国では、ものごとの本性が望むように、辞書は、国民のことばの社会的、文学的活動の堆積になるのであって、その規範とはならない<sup>(1)</sup>

これまでそうだったように、ドイツとフ

ランスが — とくに後者が — 実際にそうであるのかを問うべきではない。アスユリの取らいは、あげて、マンゾーニ主義批判にある。マンゾーニ主義は、「思考の共通性」をつくりだそうという努力もせず、ただ外面的なく言語のおきかえだけで、言語統一をはたそうとしている。しかも、その手段たるや、『新辞典』という、「堆積」ではなく、「規範」としての辞書なのである。これで、「共通語」を生みだせるはずがない。

もし『新辞典』の原理にしたがうならどうなるか、とアスコリは言う。「思考し研究する者たち、つまり、みがかれた精神的ことばをもっている者たち」に、こう命令することになる。「あなたの思考の道具をすてなさい。よいものにとりかえるか、せめてかたちをかえなければならぬのだから」。これは、「完全に同時的」でなければならぬ「ことばの近代的発展と、国民的活動・思考の近代的発展」とを切りはなしてしまうことになる。こ

(1) *ibid.*, p. 28

うして、「辞書によってか、乳母によってかはたまた、(文盲があふれる地から)その地方を文明化しようとして送りこまれてくる小学校教師によってあたえられる一地方都市の会話〔フィレンツェ〕を模倣する(猿まねする)<sup>(1)</sup>」ことになつてしまふとアスコリは言う。

またモヤ、アスコリはあやうい位置にいる。アスコリは、〈言語〉の文化性を強調するあまり、〈知識人〉の役割を重視しすぎるところがあるのは否めない。〈方言〉にたいする

ii) ibid. p. 29.

まなざしと同様。アスコリは、ロンバルディ  
 ア啓蒙主義のもっていた知性主義を、ゆずり  
 うけているとも言えよう。けれども、アスコ  
 リが理想とする知識人像は、人文主義的教養  
 にもとづく「文学者」ではなく、「イタリア  
 のあらゆるひとびとを、思考とことばの堅固  
 な統一性のなかにみちびくべき広範な文化活  
 動をひきおこす」という社会的任務をもった  
 (1)  
 「科学者」であることは、注意すべきだ。  
 この立場にたつことで、アスコリは、フィレ

ツェ口語慣用の「模倣」を命じるマングーニ  
 主義と、「古典」の「模倣」を命じる伝統的  
 純粹主義とを、同時に批判することができた。  
 「思考と言語との同時性」を破壊する「模倣」  
 という原理を奉ずる点では、両者は同じだ。  
 というのがアスコリの見方である。  
 同じような政治状況にありながら、ドイツ  
 では達成しえた。言語と思考の統一性が、な  
 ぜイタリアには存在しないのか、とアスコリ  
 は問う。これにたいする答えこそ、この「序

(1) ibid. p. 30

文」を、ほんとうに意義あるしめるものにして  
 ている。それは、イタリア文化全体にたいし  
 てなされた臨床診断である。アスコリは言う。  
 「[ドイツとイタリアとの]ちがいは、つぎ  
 のようなイタリア文化の二重の障害物によっ  
 ている。文化密度の稀薄さ、そして、形式へ  
 の過剰な配慮がそれだ。」  
 (傍点引用者)(1)  
 <文化密度の稀薄さ>とは何か。たしかに  
 「偉大な人物 *nomini grandi*」<sup>による文化的達成</sup>だけに目をやれば  
 イタリアは、ほかの国にけっしてひけをとら

ない。しかし、それをひきつぎ、その成果を  
 普及させ、社会全体の共有財産にする任務を  
 もつ「小人の群れ *gli stnoli dei minori*」が存在しな  
 かった。教師はいても、生徒がいなかった。  
 したがって、大知識人がどんなに独創的な仕  
 事をなそうとも、それは「継続的あるいは体  
 系的な連続」をつくりださず、社会的に孤立  
 した作業におわってしまふ。「平凡さ *mediocri-*  
*ta*」を嫌悪したのがイタリアであり、「神々  
 しい作品か、さもなくば何もしないか」とい

うのが、そのモットーとなってしまうたので  
ある。

つまり、こういうことだろう。〈文化〉は  
少数者の一回かぎりの創造で終わってしまう

べきものではなく、多数者がたえずその生産  
過程に参加でき、それを継続し、発展させる

ように、社会のなかで、人的物質的組織をつ  
くりださねばならない。文化の普及とそれに

よる社会的正当性の獲得は、けっして付随的  
側面ではなく、むしろそれこそ文化の本質をな

(1) このような読みかたが"不当でない"ことは、Lo Piparo, Franco, *Lingua, intellettuali, egemonia in Gramsci*, Bari, 1979 が示してくれている。

す。完結的作品ではなく、連続的活動こそ、  
文化をつくる。そこでは、〈知識人〉は、〈  
個人〉としてではなく、文化生産のための〈  
集団〉として把握される。その場合、もっと  
も重要な役割をはたすのが、文化の社会的生  
産過程を包括し、組織化し、拡大する〈中間  
的知識人〉である。〈文化密度の稀薄さ〉と  
は、文化が全社会的生産活動となっていない  
ということだ。

(1)

ここから、イタリア文化のもうひとつの病

(1) ibid. p. 31.

理、形式への過剰な配慮が生まれる。ル  
 ネサンス人文主義からクルスカ純粹主義にい  
 たるまで、社会から隔絶した空間で、「美な  
るものへの瞑想にうっとりとしてつかりこんだ芸  
 術魂の無為」<sup>(1)</sup>にふけり、皮相な形式崇拜、修  
辞崇拜を生みだしたのである。  
 まさに、これらふたつのことが、イタリア  
に言語の統一性が欠けている真の原因なので  
 ある。アスヨリは言う。「多数の精神の全体  
的運動のとぼしいことは、知識が少数者のみ

(1) ibid.

に集中したことの結果であるとともに原因で  
 もある。そして、形式にたいする繊細でゆれ  
 動きおちつかない感情は、好みのうるさい要  
求をつきつける。これらのなかにこそ、われ  
われの問題だけについて言うなら、なぜ、イ  
タリアは、堅固でしっかりとした散文、統辞  
法、言語をいまだもっていないのかというこ  
 との適切で全面的な理由がある<sup>(1)</sup>  
 したがって、問題は、文化全体をささえる  
意識構造、社会制度にかかわる。それを変革



しなければ、真の意味での言語の統一性を生  
 み出すことはできない。＜国民＞の共通語と  
 は、社会全体が生み出す知的精神的活動の拡  
 大と高揚の結果として、形成されるべきもの  
 であって、それを無視し、あらたな言語規範  
 を導入することで、人為的、強制的に、言語  
 統一をはたそうとすることは、これまでとは  
 べつの形式主義をつくりだし、かえって、変  
 革すべき文化の脆弱さを温存することになる。  
 ＜言語のおきかえ＞による統一を標榜するマ

(1) *ibid.*

ンゾーニ主義こそ、まさにその場合である。  
 アスコリは、たしかに、作家マンゾーニが  
 その作品で、口語に全面的に依拠した新しい  
 文体をつくりだすことで、イタリアをつねに  
 支配してきた修辭的形式性を追放したことを  
 評価してやまない。けれども、マンゾーニ主  
 義という「ことば」のあらたな規範についてい  
 うなら、[その文体は]模倣者のあいだで、  
 すぐさま、あらたな技巧(Arte)の過剰に下落  
 してしまった。フィレンツェ主義者は、すぐ

(1)

に、フィレンツェ語は文学語とも、ともちか  
い美しく純粋なことばであると言うが、その  
「フィレンツェ語の純粋さ」なるものは、「  
文化的運動の不足」から来るのである。だから  
こそ、フィレンツェ語を崇拜する「文芸家  
artista」には、「そのうっとりさせる清流を  
かきみだしかねない文化」という概念は、まっ  
たくの冒とくとしか思えない」のであり、か  
れらは、「知識の普及を増大しようというこ  
ころみにがんこに抵抗する」のである。こう

(1) *ibid.* p. 35

して、かつてのクルスカの「古典主義の理念」  
にかわり、マンゾーニ主義の「民衆追従主義  
*popolanesimo* というあらたな理念」<sup>(1)</sup>があらわれ  
た。「模倣」すべき対象が、古典作品とクル  
スカ辞書から、フィレンツェ日常慣用にかわ  
ったとしても、「偶像崇拜にはかわりがない」。  
「今日のあらたな理念は、こう鳴り響く。わ  
たしたちのことばづかいのなかに、フィレン  
ツェ人の家庭のことばとは異なるものがな  
もないように、書き、話しなさい。わたした

ちの不完全な模倣がフィレンツェ人に笑われ  
 ないように努めなさい。-----文化の進歩が国  
 民をつくりかえ。そこから、ヴェネツィアの  
 ものでも、ピエモンテのものでも、フィレン  
 ツェのものでもない。ほんとうの意味でイタ  
 リアのものであるような話レコトばが生まれ  
 るまで、この技巧 (l'Arte) は待ってはいない。  
 国民をあとまわしにして、[フィレンツェ語  
 の]芝居が見たいのだ。ことばレコトというものを  
 国民生活の有機体全体がつくりあげた皮膚と

(1) *ibid.* p. 34-35.

(2) *ibid.* p. 35.

は考えず、あたらしく腕をとおす袖ぐらゐに  
 しか思っていないのだ。<sup>(1)</sup>  
 アスコリのきびしい批判はとどまるところ  
 を知らないが、その言いたいところは、真の  
 共通語は、「国民の精神活動を革新し拡大す  
 る」ことによってしか、生みだせないのに、  
<sup>(2)</sup>  
 マンザーニの提唱するフィレンツェ主義は、  
 かえってそれを妨げ、「形式への過剰な配慮」  
 をむしろ助長してしまふ、ということにつき  
 る。ともあれ、このようにはげしい口吻の、

しかも広い射程をそなえた論争的論文が、な  
んら一般向けでなく、ロイタリア言語学紀要  
という専門雑誌の創刊号の巻頭をかざるもの  
だったのである。

マンゾーニとアスコリは、あらゆる点で対  
蹠点にたっている。前者がモデルをフランス  
にとれば、後者はドイツにとり、前者が話し  
ことばの根源性を強調すれば、後者は書きこ  
とばの文化的機能を強調し、前者が概念とし

ての言語と方言との区別を認めなければ、後  
者はそのあいだに活動領域のちがいを認め、  
前者が言語の共時性を視野の中心にすえれば、  
後者は言語の歴史的次元を重要視し、前者が  
共通語の専一的フィレンツェ性を主張すれば、  
後者はそのイタリア性を説く、といったぐあ  
いである。しかし、もっとも大きなちがいは、  
フギのふたつのことにある。ひとつは、マン  
ゾーニが国家管理の公教育をうけて計画的  
な言語統一をなしとげようとしたのにたいし

て、アスコリは、そうした人為的手段にたよ  
 る規範的言語統一の方法を、いっさいみとめ  
 ないということ、もうひとつは、マンザーニ  
 が単一言語主義をかかげるのにたいし、アス  
 コリは、複数言語主義をとるということであ  
 る。

アスコリが、おりにふれて用いる「自発性」  
 「自然的選択」「創造的合意」などの表現は、  
 その言語意識の本質をまざまざとえがきだし  
 ている。イタリア共通語は、なにか生きた社

(1) この「あいのく人民」とは、フィレンツェ語を話すフィレンツェの「popolo」  
 のことである。  
 純粋な

会から超越した上位の強制力や人為的手段—  
 —国家であろうと芸術であろうと、そして、  
 マンザーニ派が崇拜する観念的「人民」であ  
 ると—によつては、決して実現できな  
 い。もしそれらのちからの介入があつたす  
 るなら、それは必然的に、少数者の独占と形  
 式主義におちこむ。共通語は、社会全体の文  
 化活動のなかから内在的に生みださねばなら  
 ない、というのがアスコリの立場である。し  
 かし、アスコリは、規範的マンザーニ主義に

対抗して、言語学者としての中立性、客観性  
 を守ったと解してはならない。アスコリの態  
 度は、共通語がおのずと生まれてくるまで、  
 ただひたすら待つという待機作戦でもなければ、  
 現実の言語状況への介入を禁じる自由放  
 任主義でもない。共通語は、たしかに、計画  
 的につくるものではないが、自発的に生みだ  
 さなければならず、なにもしないで予定調和  
 的に生まれてくるものではない。  
 アスコリは、言語と思考とをけ、して切り

はなそうとはしない。この思考というのは、  
 日常的常識から抽象的思索までのあらゆる精  
 神活動のことだ。だから、言語はひとつの世  
 界観の表現としてとらえられたと言ったほう  
 がいい。ある世界観は、かならずその表現と  
 しての言語をはぐくみ、ある言語の背後には、  
 かならず、一定の意識形成の源としての世界  
 観がある。そして、この結びつきは、けっし  
 て抽象的次元でおこるものではなく、つねに  
 具体的社会活動、社会領域の基礎にたってい

る。言語、世界観、社会は、たがいがたがいの表現であるという関係にたつ。したがってイタリア共通語が、ほんとうに成立するためには、それを表現とするような世界観、社会構造をそれとともに作りあげねばならない。アスコリは、それこそ「国民文化」>「国民社会」>であると考えた。共通語を生み出すためには、言語の次元だけで話をすすめてはならず、その基盤となるような世界観と社会とを確立しなければならぬのであって、そうす

るためには、近代的知識の普及と拡大が急務である。というのがアスコリの立場と言えるだろう。それは、楽観的放任主義とは、まったくぎゃくなのであり、多数の者のく創造的合意への参加を要求している。だから、マンゾーニの場合とは意味こそちがえ、アスコリも、「言語問題」>そのものを社会化したのである。

マンゾーニとの比較をしてみるなら、マンゾーニは、たしかに、言語と社会との結びつ

きを、アスコリ以上に強調した。しかし、そ  
 こでは、言語が觀念の伝達の手段としてしか  
 とらえられず、言語と思考とは、分離しうる  
 ものとされた。そうでなければ、「イタリア  
 では、みな同じことを言っているが、言いか  
 たがちがうだけ」という理由で、く言語のお  
きかえが可能であるなどとは、とても考え  
 なかつただろう。アスコリの言うく自然的選  
択は、けっして、くおきかえではない。  
 語自身、あらたな表現のために、ことば

を自発的にえらびとるということである。  
 もうひとつ重要な点は、マンゾーニが、言  
語のく一体性の理論をもとに、社会が同質  
 的全体となるためには、そこでの言語は、せ  
ったいにくひとつでなければならぬ —  
 una lingua una — とするのにたいし、アスコ  
 リは、社会において、言語はかならずしもく  
ひとつであるひとつようはないと考えること  
 である。アスコリにとって、く国民文化く  
国民社会を形成することは、文化、社会の



あらゆる局面と領域を、均質化、画一化する  
 ことを<sup>意味</sup>しなかった。すでに述べたように、アス  
 コリは、フランスのような単一言語主義がく  
 思考のステロタイプを生み出す危険性をふ  
 くむとし、他方で、方言のなかに「国民の知  
 的営為を共通化するための最初の基礎」を見  
 だしていた。共通語を形成するということ  
 は、さまざまな地方に固有の言語的形成力を  
 圧殺することではないという把握が、そこに  
 はある。

(1) *ibid.* p. 31

これをよく示すのが、二言語併用(バイリ  
 ンガリズム)についてのアスコリの考察であ  
 る。ここで二言語併用というのは、イタリア  
 語と方言についてのことだ。マンゾーニ主義  
 者によると、「子どもたちをほとんど二言語  
 併用のままにしておくこと、つまり、母方言  
 をのこしたまま、子どもたちに、外国語のよ  
 うなやりかたで、われわれの言語を強いて学  
 ばせること」は、たいへんな害をもたらすば  
 かりか、子どもたちの知性を浪費することに

(1) *ibid.* p. 32.

なるということだが、アスコリは、この考えかたはまちがっていると言う。もちろん、マゾーニ主義の理論から言うと、そうであるからこそ、フィレンツェ語による全面的なく言語のおきかえがむつようになるという理<sup>(1)</sup>くつになるのである。アスコリは、これにたいして、「二言語併用の子どもたち *figliuoli bilingui* は、知性の次元において、特権的な条件にある」として、学校における二言語併用を擁護するのである。しかし、「特権的」

(1) Raicich, Marino, *Scuola, cultura e politica da De Sanctis a Gentile*, Pisa, 1981, p. 92-95.

アスコリの報告は、同書 p. 425-431 に収録。

であるとは、いったいどういうことか。この点を明らかにするためには、「序文」をはなれなければならない。

1874年9月、ボローニヤで、第九回イタリア教育者会議がおこなわれた。その第二討議事項は、「文法をつうじての言語の理論的教育は、初等学校にふさわしいか。そう認められたとしても、高学年だけにとどめておくのが適当ではないか」というものであり、これについて、アスコリが報告者となった。

アスコリは、ヤーコフ・グリムが「母語の  
 文法教育の原理に反対した」ことにふれる。  
 グリムは、文法をほどこすことにより、母語  
 のもつ自然のちからがゆがめられ、まづしい  
 ものになってしまおうと言っていた。けれども  
 アスコリは、わたしたちのところでは事情が  
 ちがうと言う。グリムは高地ドイツ語のこと  
 だけを考えていたのだが、「イタリアで書か  
 れている言語をおぼえるために、エミールア  
 ヤロンバルディアのコムーネが、初等学校へ

おくった子どもたち」のことを思いうかべる  
 なら、いったいどうなるのか、というのであ  
 る。つまり、グリムは「母語の文法教育」に  
 たいして反対したのだが、イタリアのほとん  
 どの子どもたちにとって、イタリア語は母語  
 ではなく、「ひとつのあたらしい言語」なので  
 ある。こうして、アスコリは、たとえ初等  
 学校であっても、イタリア語を教えるため  
 は、ある種の文法教育がひとつようであると主  
 張する。しかし、それは、文法知識のための

文法教育。文法規則の機械的教えこみであつてはならない。実地練習をつうじた文法教育をつうじて、方言とイタリア語とが、ことなる形式と規則をもった言語であることを理解させ、たえずそれらふたつを比較対照しながら学習をすすめる、ということである。つまり、イタリア語の文法の一方向的押しつけではなく、方言とイタリア語とのあいだにある類似性と差異の理解、二言語間の関係性についての文法教育である。その意味で、ラテン

語文法の延長としての規範文法ではなく、十九世紀比較言語学の精神につうじる科学的文法である。アスコリは、このく比較フという精神活動の重要性を強調してやまない。

アスコリはミラノ語を例にとっている。

el fioeu el dis. (息子は言う)

ミラノ語は、反復代名詞用法をとるから、これをそのままイタリア語におきかえると、

il figlio egli dice.

となるが、この egli は不用であり、むしろ省

いたほうがよい。さらにこれを複数にすると

ミラノ語では、

*i fioeu disen.*

となるが、イタリア語では、

*i figli dicono.*

となり、単複同形の *fioeu* は、*figlio/figli* の

区別におきかえねばならない。アスコリは、

まだ例をいくつかあげているが、それは省ニ

う。そこで、アスコリは、このようなちがひ

を教えるのに、統辞法の規則や単数と複数と

の区別などの文法的概念を、どうしてなしで

すまふことが出来るのか、と言う。それはと

もあれ、イタリア語は、たえず方言と比較さ

れながら学習されねばならないのだから、そ

の意味で、子どもたちが身につけている方言

は、イタリア語を学ぶためには、欠かすこと

のできない豊かな土壌となるのである。

けれども、アスコリは、イタリア語学習を

ただ合理化しようとするために、こうした提

言をするのではない。ふたつのことなること

(1) ibid. p. 427

(2) ibid. p. 429

ばを「たえず比較するという作業」をつうじて、  
 「無意識的であったもの」を「意識的なもの」にたかめ、「あらゆる精神活動の、先  
 ばしりも行きすぎもない、健全な発展と力強  
 い行使」<sup>(1)</sup>「精神能力のあたらしい段階」<sup>(2)</sup>にみ  
 ちびくということが、究極の目的であった。  
 つまり、イタリア語と方言との比較対照学習  
 によって、すべての科学的思考のもととなる  
 精神の分析能力がはぐくまれるというのであ  
 る。アスコリが、「二言語併用の子どもたち」

(1) ibid. p. 430

の「特権的な条件」と言ったのは、まさにこ  
 のことである。だから、トスカナのように、  
 「子どもたちが、生まれながらにたやすく、  
 国語を理解できる」ような地方では、ぎゃく  
 に、「言語と思考の現象についての反省」<sup>(1)</sup>を  
 意識的によびおこすために、特別な手段がひ  
 つようだとさえ、アスコリは言う。もしかす  
 ると、アスコリは、さまざまなことばにとり  
 かこまれながら、ほとんど独学で言語学的素  
 養を身につけた、ゴリツィアでの少年時代を

(1) p. 431

思い出していたのかもしれない。

このような提言をささえたのは、アスユリが、知識の安易な平準化に反対する態度をとっていたことがある。マンゾーニ主義にたいする。〈popolanesimo〉という批判も、ある意味ではここから生まれる。「正当な難しさという摩擦が小さくなればなるほど」、車は上滑りして回らなくなる」とアスユリは言う。〈比較<sup>(1)</sup>〉という知的作業は、前に進むためには不可欠の〈摩擦〉なのである。

(1) ibid. p. 430

しかし、もっとも注目すべきは、「われわれの国のさまざまな地方に応じて、ことなる教育学的準備がひつようである」というアスユリの意見である。〈比較<sup>(1)</sup>〉による文法教育は、二言語間の関係性をあきらかにするためであり、子どもたちの母語である方言は、地方ごとにことなる文法形式をもつのであるから、イタリア語との対照学習は、それにあわせて、ことなる方式にもとづかぬばならない。同一のイタリア語であっても、〈基層<sup>(1)</sup>〉とな

る方言がちがえば、さまざまなすがたであら  
 めれるのである。ある意味で、言語の多様性  
 と統一性という問題は、〈基層〉理論を中心  
 としたアスコリの言語学の根幹をなす主題な  
 のであり、「序文」も、ここでの教育学的提  
 言も、そのなかから生まれでた実践作業であ  
 った。このような知的誠実さがあればこそ、  
 アスコリは、〈言語問題〉に対応するとき  
 も、けっして言語政策家になることはなかつ  
 たのである。

アスコリが、知性教育を重んじすぎるとか  
 文法のちからを信じすぎているとか、また、  
 方言教育そのものにはふれていないとか言っ  
 て、批判するのはたやすい。しかし、アスコ  
 リの提言が、なにに対してなされたものなの  
 かを見なければならぬ。それは、ある大勢  
 に抗してなされた発言なのである。つまり、  
 地域ごとにふさわしい方法を用い、生きたみ  
 なもととしての方言とつねに比較対照しなが  
 ら、イタリア語教育をすすめるということは、



く国家語ヲイデオロギーにもとづく、画一的  
 で強制的なく国語教育ヲを、完全に否定する  
 ことになるのである。たしかに、アスコリの  
 見方では、方言は、く国語ノの下位におかれ  
 るのであるが、それは方言そのものの内在的  
 価値を認めないことではないし、方言をすて  
 てく国語ノに言語変換をさせることでもない。  
 だいいち、アスコリにすれば、真のイタリア  
 共通語は、いまだ実現していないのである。  
 だから、アスコリが二言語併用を擁護した

のは、上位言語と下位言語との社会的機能分  
 担を強化しようとしたわけではない。それは、  
 言語空間全体の同質化をめざすマンゾーニ主  
 義に対立するだけでなく、方言話者集団と国  
 語話者集団との社会的断絶を固定化し、社会  
 的ヒエラルキーと結びついた二層言語状態を  
 維持しつづけようとする立場にも、はげしく  
 対立するのである。そして、前者はフィレン  
 ツェ主義に、後者は伝統的な言語純粹主義に  
 その正当性の理論的根拠を見いだしていた。

じつは、この後者の立場こそ、この時点で、  
もっとも支配的な言語イデオロギーであった  
のである。

こうして、言語問題は、社会の言語体  
制をめぐるヘゲモニー闘争の舞台となる。こ  
れを見のがすことは、言語問題を矮小化  
することになるだろう。

## (2) ドヴィデオ

— あらゆる意味で調停者

アスコリは、第九回イタリア教育者会議に  
むけて、上に述べたような、きわめて注目す  
べき報告書を提出したが、諸々の理由で、会  
議じたいには出席できなかった。そこで、代  
理として送られたのが、アスコリの弟子とも  
言える言語学者、フランチェスコ・ドヴィデ  
イオである。会議の席で、アスコリの報告が

(1) F. D'Ovidio e altri, *Discussione*, in *Scritti linguistici*, Napoli, 1982  
p. 149. (D'Ovidio, Francesco)

発表され、それが討議に付されたとき、賛成  
意見もあるにはあったが、ドヴィデオは、  
保守的教育者からのはげしい反発にであった。  
それはこういうものだ。「古典学習におもむ  
く生徒と、初等課程がゆいいつの学習財産と  
なる生徒とは、区別しなければならぬ。民  
衆の学校、農村の学校には、文法は必要ない」。  
「農村の学校では、文法はまったく無用だ」。  
このような声を前にして、ドヴィデオは、  
かれらの要求を一部受け入れ、ひとつの調停

(1) *ibid.* p. 151.

案を提出する。そして、そこには「農村の学  
校では、理論的文法教育をとりぞくこと」  
という項目が、入れられることになる。いっ  
たい、これは何を意味しているのだろうか。  
アスコリの報告にたいする教育者からの反  
対のなかに、農村の子どもたちを、無益な文  
法教育から解放しようという意図を見るのは、  
まったくまちがっている。かれらにとって、  
文法教育はきわめて価値のある重要なもので  
あるからこそ、アスコリの報告に反発をしめ

したのだ。つまり、文法教育は古典学習へつ  
 ながる高度な文化的知識をさずけることを目  
 的とするものであるから、農村の子どもたち  
 には必要がない、ということだ。農民には、  
 読み書き以上の——ときにはそれさえも——  
 知的教育をほどこすべきではないという教育  
 観に、基本的にはもとづいていっていると言っ  
 てよい。だから、ドヴィデオの譲歩は、都市  
 農村を問わず、あらゆる児童に知的訓練をう  
 ける権利があるというアスコリの主張を、本

質的なところで、うらぎってしまふものであ  
 る。アスコリの主張するような、科学的文法  
 による言語と方言との対照学習を実現できる  
 ような状態は、当時の学校体制では望みえな  
 いものだったし、教育者たちの思いうかべる  
 文法は、やはりラテン語にもとづく規範文法  
 であったことに、根本的なくいちがいがあっ  
 たとも言える。しかし、そうであるにせよ、  
 都市と農村にことなる教育原理をあたえるこ  
 とは、〈国語〉と〈方言〉との分裂的二層言

語状態を温存することを望む世界観をふくんで  
 いるのである。(アスコリの提唱するよう  
 な文法学習が、真の打解策になるかどうかは  
 べつの問題だ)

というのは、保守的知識人がいなく世界観  
 は、く国語の世界とく方言の世界が、有  
 機的ブロックをつくらないまま、たがいに補  
 完的機能をおびつつ、断絶しながら并存する  
 というものだったからである。都市/農村、  
 高等教育/初等教育、古典教育/専門教育、

(1) Raicich, M., op. cit., p. 95

男性/女性、知識/道徳、科学/宗教、精神  
 労働/肉体労働などの、社会の上/下のヒエ  
 ラルキーをさまざまな角度から表現する。一  
 連のおりかさなりながら連係する二項対立に  
 よってささえられた世界観のなかで、国語/  
 方言は、もっとも端的な表象のひとつだった  
 のである。(おもに政治的な理由から、都市  
 教員と農村教員とのあいだに、養成方法の区  
 別さえ要求されたほどだった)

じつは、マンザーニもアスコリも、この社

会を上/下に分断する二層言語状態をささえる言語意識を批判し、その言語体制をくつがえそうとしたのである。そのことは、マンゾーニの『報告』にたいして、<sup>ジェズイット会の</sup>雑誌『カトリック文明』がおこなった批判を見れば、歴然とする。それによれば、「野卑な農民の群れ」と「市民的環境の若者たち」とのあいだには明確な区別をつけねばならない。「あのことは」[イタリア語]とあの発音も、民衆の下層階級に教えようという努力は、すべて、ほと

(1) Gensini, S. (cur.), *Lingua e dialetti nella cultura italiana da Dante a Gramsci*, Firenze, 1980, p. 151-157 に所収。引用は p. 156, p. 157.

んど<sup>(1)</sup>の場合、むだ層となる」からである。これは、アスコリのもとは、まったく正反対の方向からなされたマンゾーニ批判ということでは、注目すべきである。マンゾーニとアスコリとの対立を強調しすぎるあまり、両者が共通にわかちもっていた純粹主義と修辞性崇拜にささえられた過去の言語体制の打倒という契機を見おとしはならない。けれども、ぎやくに、マンゾーニとアスコリを安易に調停させることは、かえっ

11) D'Ovidio, F., *Lingua e dialetto*, in *D'Ovidio, op. cit.*, p. 46-65.

て、両者の持つ批判性をそぎおとして、伝統  
 的言語意識との接合さえ可能にすることにな  
 る。ある意味で、この役割をひきうけたのが  
 ドヴィデイオなのである。上の教育者会議で  
 のできごととは、ささやかながらも、そのこと  
 を暗示してくれている。

アスコリよりも20才年下のドヴィデイオは、  
 論文「言語と方言」(1873) — 24才のとき —  
 において、アスコリの「序文」の線にそい

ながらも、マッゾーニ理論の肯定面と否定面  
 をよりわけようとした。まず、ドヴィデイオ  
 は、言語にかんして、「歴史的問題」と「実  
 践的問題」とをはきり区別しなければなら  
 ないと主張する。「歴史的問題」にかんして  
 は、14、15世紀に、フィレンツェがイタリア  
 文化の中心であったために、フィレンツェ語  
 がイタリア全土の「文化言語 *lingua della coltura*」  
 として採用されたが、その後、フィレンツ  
 エの勢力がおとろえた反面、他の地方の勢力

が成長したため、言語問題が発生した。  
とされる。言語問題のまとめかたとして  
は、それほど問題もなく、妥当なものである  
が、まずitalianisticの立場をリリぞけること  
をねらったのかもしれない。

この論文の重点は、マンゾーニ理論の實踐  
的側面の検討のほうにかかっている。ドヴィ  
デオによれば、マンゾーニ主義の最大の功  
績は、グルスカのアカデミー主義を徹底的に  
批判したことにある。イタリアでは、フィレ

(1) *ibid.* p. 51.

ンツエの中心性、優位性が失われた一方で、  
国民的知識の交流も存在しなかったため、言  
語規範は、トスカナ古典作家のなかのみ、  
まとめられた。こうして、一種のカノンが成  
立し、古典作品が慣用の基準となり、歴史辞  
書と慣用辞書とが混同されるにいたった。こ  
うしたなかで、マンゾーニ主義の意義は、こ  
とばをつくるのは、「その言語をつかう者ど  
うしのあいだで、いかなるかたちであれ、定  
められた合意」であることを気づかせた点に

(1)



ある。言語純粹主義のあやまりは、ことばを  
 れじたいのなかに、なにか尊重すべき美的価  
 値があると信じたことにあるが、マンザーニ  
 主義によって、ことばの真の価値は、「指し  
 しめすべき観念をすぐさまよびおこす」こと  
 その共時的な濫用のなかにあることが明るみ  
 にだされた、とドグスデイオは論ずる。  
 つまり、マンザーニ主義のなかのひとつの  
 要素であるく濫用論が、評価されたこと  
 になる。しかし、ドグスデイオは、そのほか

(1) *ibid.* p. 53.

の要素、言語のく一体性論の理論、く話の  
 絶対的支配、フィレンツェ中心主義のそれを  
 れに疑念をさしはさんでいく。  
 ドグスデイオはこう論ずる。マンザーニ派  
 が、言語のく一体性論の欠如のしるしとして  
 あげるのは、いつも具体的事物の名称のこと  
 なのであるが、「それは、それほど嘆くにた  
 らない。むしろ、時間が解決するもの」であ  
 る。じじつ、文学、芸術、政治、歴史、科学  
 などを論ずるときには、イタリア人のあいだ

で対話が成立しているのである。その一方、  
 「すべてでなければ無」という観点から言語  
 をながめるのは、言語をひとつの「有機体」  
 として把握することであるが、語彙は文法ほ  
 どの有機的統合性をそなえていない。したが  
 って、語彙においては、マンザーニが言うよ  
 うな意味でのく一体性クはありえない。  
 後者の批判は、マンザーニ主義の理論的核  
 心をついた。正当なものといつてよいだろう。  
 ところが、ドヴィデオは、むしろ、前者の

(1) *ibid.* p. 54

点、つまり、<sup>日常生活とはべつの次元で</sup>言語が独自の文化的機能をもつ  
 という点を強調していくのである。  
 ドヴィデオによれば、話されているだけ  
 だった方言が、文字にうつされるようになる  
 と、「しだいにある種の文学伝統にむかって  
 安定化していく」<sup>(1)</sup>。そうすると、その書きこと  
 ばは、もとの方言からは独立して、「いくつ  
 もの地域の教養人のことば」になっていく。  
 だからこそ、イタリア人のあいだでは、文化  
 的次元で共通語が成立しているのであり、そ

1) *ibid.* p. 55.

れは、もとのフィレンツェ語とはべつの形成  
 過程をたどっている。そこでいまとつぜん、  
 フィレンツェ語慣用をイタリア全体に移植し  
 ようとすることは、「合意と、すでになされ  
 つつある統一化を、つくりあげるどころか、  
 そのさまたげとなる」のである。けれども、  
 (1)  
 その一方で、クルスカのような復古主義をと  
 るべきでもない。文化言語は、日常の話しこ  
 とばとは独立しながらも、それじたいに独自  
 の歴史的変化を経ているからである。こうし

1) *ibid.* p. 56.

2) *ibid.* p. 61.

て、ドヴィデイオによれば、現在の言語の規  
 範となるべきは、「作家そして教養ある話し手  
 のあいだで、どのようなかたちにせよ成立し  
 た合意」にもとづく「生きた文学慣用」であ  
 (1)  
 ることになる。  
 さらに、ドヴィデイオは、今日のイタリア  
 には、国民のこゝばの求心的中心になるよう  
 な都市が存在しないのだから、なおさる、こ  
 れまでの文化言語をすてるわけにはいかない  
 と言う。「教養あるイタリア *Italia colta*」が知  
 (2)

らないようなフィレンツェ語の単語を、すでに  
 にみなが理解しているものとして用いること  
 はできない。フィレンツェ人自身が、マンゾ  
 ーニ主義に疑念をもつのは——ドヴィデオ  
 はフィレンツェ部会のマンゾーニ批判を思い  
 うかべていたのだろうか——。かれら自身、  
 フィレンツェの現代慣用と文学語とのあいだ  
 のへだたりをよく知っているからだ。マンゾ  
 ーニのフィレンツェ中心主義は、チエーザリ  
 の1300年代崇拜と同様、理論的行きすぎであ

る。けっきょく、ドヴィデオは、こう結論  
 する。「精神のなかに、いつもの自発的で自  
 然な道すじをつうじて入って来るわけではな  
 い言語を、たとえその一部であっても、冷や  
 やかに、計画をつうじて、国民にうけいれさ  
 せようとするのは不可能である。言語の一部  
 とはいわず、たったひとつの単語であっても、  
 それが国民全体に広まるためには、文化的方  
 言が、国民すべての者にうけいれられるよう  
 に、る手段がひとつようである。それこそ、作

1) ibid. p. 65.

家たちの適切で効力のある慣用であるの  
(1)  
 一見すると、ドヴィデオは、アスコリの  
 主張にもとづいて、マンザーニを批判してい  
 るようにも見えるが、じつはそうではない。  
 ドヴィデオがたよりにする「文学慣用」の  
 存在など、アスコリの考察では重要性をもた  
 なかった。アスコリが共通語をつくる基盤と  
 みなした文化は、作家がつくるものではなく、  
 く並のひとによる社会全体のたえまない活  
 動——その中心はむしろ科学者だ——から生

まれるものであった。アスコリによれば、文  
 化の発展をおしとどめているのが、文学者た  
 ちなのである。だから、アスコリが、く文化  
 密度の稀薄さ>とく過度の形式崇拜>に、イ  
 タリア文化を停滞させた根本原因を見て、そ  
 れらを変革しなければ、真の意味での共通語  
 はかくとくできないと断言した点に、ドヴィ  
 デオは、なんら答えていない。ドヴィデオ  
 オによれば、これまで独自の発展をつづけて  
 きた文学言語をさらに社会に普及しさえすれ

ば、予定調和的に共通語が成立するはずなの  
 である。ちがったすがたをとったにせよ、マ  
 ンザーニとアスコリがあかちもっていた、過  
 去の言語意識との訣別の意志が、ここにはま  
 ったく欠けている。ドヴィデオが強調する  
 のは、伝統の連続性である。マンザーニとア  
 スコリの対立点をなれくずしにしたまま調和  
 させようとしたドヴィデオの楽天性は、こ  
 こから生まれる。したがって、ドヴィデオ  
 は、アスコリの説のもっとも革新的な部分を

見おとしたのみならず、なぜマンザーニが、  
 言語におけるく話フの絶対的支配を説くこと  
 もに、フィレンツェ中心主義をとることにな  
 ったかの根本的な動機さえ理解していない。  
 ドヴィデオにとっては、確固として存在し  
 たものであった「生きて文学慣用」など、出  
 発点のマンザーニにとっては、まぼろしにす  
 ぎなかつたのである。そこではじめて、く言  
 語フとく文学フとの地位転倒がおこなわれた  
 とともに、く言語フが、ある具体的になく社会フ

と結びついていなければならぬことが明らかになったのである。マンゾーニが、く文学慣用フなどという表現を聞いたなら、驚愕したであろう。く文学フそれだけでは、けっしてく慣用フを形成するちからをもちえないからである。けれども、ドヴィデオは、マンゾーニ理論のなかからく共時性フの強調という契機だけをひっぱりだしてきて、それを文学言語の領域にうつしかえるというはなぬわがをやったのけたのである。

(1) Vitale, M., op. cit., p. 470.

(2) D'Ovidio, F., La questione della lingua e G. I. Ascoli, in D'Ovidio, op. cit., p. 66-72.

しだいに、ドヴィデオは、マンゾーニ主義のリベラルな性格を評価していくとともに、アスコリのマンゾーニ批判に留保をつけくわえていくようになる。そして、ついに、ドヴィデオが、マンゾーニとアスコリのふたつの立場をひとつの調和的言説のなかに溶かしこむときが、やって来る。アスコリの「序文」が1914年に再刊されたときに付された、ドヴィデオの「言語問題とグラツィアデオ・アスコリ」と題された序文が、それである。

1) ibid., p. 69.

ドヴィデイオは、プロリオ任命の委員会が  
 発足してから、マンゾーニの『報告』、『補遺』  
 の発表、『新辞典』の刊行、アスコリの「序  
 文」での反応までの「言語問題」の経緯を手  
 みじかにまとめあげたのち、マンゾーニとア  
 スコリとの調停作業にのりだす。ドヴィデイ  
 オによれば、マンゾーニとアスコリの一致点  
 は、「イタリヤ文学語のフィレンツェ起源を  
 みとめる」ことにある。対立点が生まれるの  
 (傍点引用者) (1)  
 は、「マンゾーニが、辞書によって、効果的

1) ibid.

に、[言語の統一<sup>性</sup>の欠如という]われわれの  
 歴史の損害を修復しうると望んだのにたいし、  
 アスコリは、そのような損害は、人為的手段  
 によっては修復できないし、また、「ひとが言  
 うほどはなほだしいものではないと考えた」  
 ことにあるとされる。マンゾーニ主義の説く  
 人為的言語統一に、アスコリがはげしく反対  
 したことは事実である。けれども、アスコリ  
 が、「言語の統一性の欠如を「ひとが言うほど  
 はなほだしいものではないと考えた」かどう



かはあやしい。むしろ、そう考えたのは、ド  
 ヴァイデオのほうだろう。そして、ドヴァイデ  
 イオのめざすのは、このようなマンガーニと  
 アスコリとの対立を相対化し、両者の一致点  
 を前面におし出すことにある。つまり、「  
 イタリア文学語のフィレンツェ起源」である。  
 くイタリア性>とくフィレンツェ性>の融合  
 をはかること。これがドヴァイデオの目的で  
 ある。  
 ドヴァイデオは、両者のちがいは、マンガ

ーニがフランスをモデルに、アスコリがドイ  
 ツをモデルにとったことから来ると言う。ア  
 スコリによれば、イタリアはドイツと似た状  
 況にありながら、文化の稀薄さと形式崇拜と  
 いう弱点をもっているので、マンガーニ主義  
 のように言語様式の改変だけでは、かえって  
 その弱点をますばかりであって、文化活動の  
 普及によって漸進的改革をおしすすめるべき  
 である、というように、まずは妥当にアスコ  
 リ説がまとめあげられる。(ただし、ドヴァイ

(1) ibid. p. 70

(2) ibid.

ディオは、アスコリ説の改革の漸時性を強調  
するのを忘れない。「欠けているものは、時  
間が解決する」というのである)

しかし、ドヴィディオは、「序文」におけ  
るアスコリのマンゾーニ批判には「論争的な  
行きすぎ」<sup>(2)</sup>がある<sup>(1)</sup>と見なす。マンゾーニ主義

は、アスコリの言うように、言語純粹主義と  
同一視<sup>は</sup>できない。純粹主義は、あらたな表現  
をもとめる作家を絶望におとしおいたが、マ  
ンゾーニは、フィレンツェ語だけでうまくい

かないときは、借用にせよ、新語にせよ、新  
しい要素の導入をこばんではいけないからであ  
る。ドヴィディオは言う。けれども、マン  
ゾーニ主義は、このような文学理論にとじま  
るものではなかったはずなのだ。ドヴィディオ  
は、マンゾーニを擁護しながら、じつはマ  
ンゾーニの意図とはぎゃくに、「言語問題」  
を「文学問題」にひきもどしてしまったので  
ある。

しかし、ドヴィディオの調停作業が極点

達するのは、マンゾーニ説とアスコリ説のそれぞれの根拠を、イタリア語史のことなる歴史的段階に位置づけることによって、兩者の対立を歴史的相対性のなかに解消してしまうときである。ドヴィデオは言う。

「マンゾーニは、かれの実践的教義を、トスカナとフィレンツェが一種の言語的独裁を  
とっていた。最初の三世紀〔14～16世紀〕の  
事実だけから、もっぱらひきだしすぎた。そ  
れにたいし、アスコリは、文学と言語の活動

が、よきにつけあしきにつけ、イタリア全体  
のものだった次の三世紀〔17～19世紀〕を、  
偏愛の目で見すぎた。しかし、われわれの榮  
光と苦難の歴史は、これら六世紀すべてを包  
含しているのであり、われわれの現在と未来  
における行動は、その六世紀すべてから生ま  
れてこなければならぬ！……したがって、  
(傍点引用者)  
フィレンツェ語は、真正で清新なイタリア性  
(italianità)の生きた鏡としてとらえねばなら  
ない。ただし、文学慣用(uso letterario)が確固

(1) ibid. p. 71.

として定まったところでは、そこからはずれたものであれば、規範としてとってはならぬし、また、文学慣用がゆれていたり、まったく欠けているところでは、絶対的權威としてではなく、しばしば貴重な助言をあたえてくれる忠告者としてとらねばならない。

(1)

なるほど、もし「言語問題」が「文学慣用」にのみしかかわるものであるとするなら、このドヴィデイオの結論は、「言語問題」の理論的総括とそこからひきだされる実践的方向が

けとしては、よくできたものであるかもしれない。そして、そうすることで、マンゾーニ理論も、アスコリ理論も、おのおのの偏向が指摘されるとともに、その有効性の歴史的限界のなかにとじこめられ、安全な歴史記述のなかに埋没してしまふ。それこそ、ドヴィデイオの調停作業の行きつくところであった。けれども、ドヴィデイオは、ただやみくもにマンゾーニとアスコリとを和解させたかっただがために、こうした調停案を提示したわけが

はない。そのほんとうの目的は、14世紀から  
 現在までにいたるくイタリヤ語史に統一的  
 視点をあたえ、それがひとつの調和的全体像  
 をつくることをしめすことにあつた。くイタ  
 リヤ文学語のフィレンツェ起源」という把握  
 こそ、その視点をつくる。ただし、それは、  
 一定の歴史的時点における事実をさすものと  
 いうより、言語史全体を統括する原理となる。  
 しかし、その原理が、くイタリヤ」とくフィ  
 レンツェ」というふたつの軸の相克と均衡か

ら成り立っているだけ、その歴史はドラマ性  
 を帯びる。「われわれの栄光と苦難の歴史」  
 がそこに展開する。けれども、その歴史は破  
 綻することがない。なぜなら、それはつねに  
 「われわれ」の同一性にもとづいてゐるから  
 だ。  
 くイタリヤ語史は、歴史的大団円を待ち  
 のぞむく物語」として、超越的視点から語る  
 ことができるようになった。そのばあい、つ  
 ねに論争と分裂の種をまくく言語問題」は、

それだけ、歴史化され、歴史を語る者がとど  
 まるべき地点にまでもはや侵入してこないよ  
 うにするひつようがあった。そのために、ド  
 ヴァイデイオは、マンゾーニにたいしても、ア  
 スコリにたいしても、ある種の理論的穩健化  
 をはかる。言語におけるく話の絶対的支配  
 を説いたマンゾーニの徹底性も、共通語の確  
 立のためには社会全体の文化制度の革新がひ  
 つようであるとしたアスコリの批判性も、そ  
 のすがたは、ドヴァイデイオの言説のなかには

ひとかけらものこらない。こうしたうえで、  
 ドヴァイデイオは、く文学慣用フやく文学伝統フ  
 という、マンゾーニもアスコリもく言語問題フ  
 の解決には無カであるのみならず、ふ  
 たたびもちだすことができたのである。  
 ドヴァイデイオは、マンゾーニ主義が、たん  
 なる文学の領域だけのできごとではなく、社  
 会における言語の同質化をめざす、一定の政  
 治的プログラムでもあったということをおぼ  
 えている。アスコリのマンゾーニ批判は、その

マンゾーニ主義の政治性にむけられていたの  
 である。この重要な点をたなあげること  
 ドヴィデイオは、く言語問題をもういちど  
 文学者による言語規範の形成という問題にし  
 てしまった。だから、ドヴィデイオは、マン  
 ゴーニとアスコリが、はげしく対立しながら  
 も共通に提示したく言語問題の社会的、政  
 治的次元を回避して、それ以前の段階にもど  
 ってしまったとも言える。  
 しかし、それは慢然とした回帰ではない。

ある意味で、ドヴィデイオのような、文学伝  
 統を根拠としたく言語問題の解決策は、状  
 況がもともといていたともいえる。文学の領域だ  
 けに眼をやっても、マンゾーニ派とクルスカ  
 派は歩みよりを見せ、クルスカもマンゾーニ  
 の作品をみずからの規範のなかにとりこむこ  
 とができるようになっていた。かつてマンゾ  
 ーニ派の旗印であった『新辞典』は、もはや  
 まったくぬすれさられたかっこうになってい  
 た。体制化したマンゾーニ主義のあとには、

ヴェリスモ、デカデンティズモなどのあらたな潮流が生まだされていった。このように穏健化し正当性を付与されたマンゾーニ主義を背景にかんがえれば、アスコリのきびしい批判は、「行きすぎ」としか見えなかったであろうし、また、マンゾーニ主義のフィレンツェそこから政治性をはぎとったうえで中心主義を文学伝統のなかに救済するという作業も、たやすくおこなわれえたであろう。なにしろ、ドヴィデオによれば、マンゾーニの散文も、文学伝統からの逸脱ではないの

だから。  
 ミリオリーニやヴァターレも言うように、ドヴィデオは、〈言語問題〉にひとつの結論をあたえたのかもしれない。じつ、これ以後、〈言語問題〉は、活発な論争的テーマであることをやめるのである。しかし、それは、ドヴィデオのような調和的言説と把握のなかで、もはや〈問題〉として語らなくてすむようになったからである。だから、ドヴィデオは、〈言語問題〉を解決したわけではな



い。そもそも、それは、ひとりの言語学者の  
 言説によって、解決さるべくもないものな  
 のだ。むしろ、ドヴィデオがやったことは、  
 <言語問題>の歴史的忘却化である。完全に  
 わすれはてるというのではなく、過去にはそ  
 んなことがあった……と語ることによって、  
 現在の意味を問わずにすむことができるよう  
 になった。ここではじめて、立場決定も介入  
 もいらずに<言語問題>について語ることの  
 できるような中性的な場所が設定された。そ

の場所を、ダンテからマンゾーニにいたる、  
 統一的文学伝統は与えてくれたわけだ。もし  
 て、それは、<言語問題>を生みだすみなも  
 ととしての社会的、政治的次元を見えなくさ  
 せる手段でもあった。

そして、この点から見れば、ドヴィデオ  
 の結論づけがあらわにしているのは、何世紀  
 ものあいだ<言語問題>の中心的言説をつく  
 ってきた伝統的テーマ系の無効性である。ドヴ  
 イデオが、文学言語を中心とした言語規範

の設定という伝統的テーマ系にまいもどったこ  
 とにより、もはや「言語問題」は、社会状況  
 のなかではさしたる重要性をもたなくなり、  
 空中分解してしまった。ある意味で、このこ  
 とは、「言語問題」を社会的次元のなかでと  
 らえかえそうとしたマンザーニやアスコリに  
 よって予告されていたことでもある。したが  
 って、真の言語の問題は、伝統的なく言語問  
 題」の枠組のなかでは、とらえがたくなっ  
 てきたのであり、やっと、言語そのもののもつ

社会的なちからを明るみにださねばならなく  
 なったのである。  
 「言語問題」が、けっして論ずる価値のな  
 いものになったというわけではない。社会的  
 なパースペクティブでとらえかえされた「言  
 語問題」は、思わぬ面を見せてくれることが  
 ある。20世紀における「言語問題」<sup>ドエル・パオロ</sup>、パゾリ  
 ーニの提出した「新言語問題」がそれである。  
 1964年に、パゾリーニが発表したエッセイ「

(1) パヅリーニの論もふくめて、この論争の経緯は、

La Nuova questione della lingua, a cura di O. Parlangeli.  
Brescia, 1971, によって知られる。

新言語問題」は、ほぼ二年有余にわたり、ジャーナリズムをにぎわせる論争のきっかけとなった。これについてはここではくわしく述べる<sup>(1)</sup>ことができないが、パヅリーニの論点と  
いうのは、こういうことである。伝統的イタリア語の人文主義性とその担い手としてのブルジョアジーの弱さのため、これまで、イタリアにはく國語>が成立していなかった。しかし、いまや、北部のテクノクラシーによって新資本主義段階に入ったイタリアにおいて、

企業とマス・メディアに支えられた、伝達のみを目的とするテクノロジー的言語が、社会全体の言語コードを同一化、均質化しつつある。ここではじめてく國語>としてのイタリア語が生まれたのである、とパヅリーニは論じた。もちろん、パヅリーニは、その状況も是認しているのではなく、あらたな対抗手段を見いださねばならないと言っているのだが、客観的現状認識が肯定的主張ととりちがえられたことや、パヅリーニ自身の論法がたい強

(1) Lo Piparo, Franco, *Lingua, intellettuali, egemonia in Gramsci*, Bari, 1979. は、く言語学者フグラムシをうきほりにした刺激的な著作である。

引なところ<sup>が</sup>わざわいして、さまざま側からの批判をうけたのち、論争は自然消滅してしまった。けれども、当時よりもむしろ今日、パツリーニが提出した問題は、論ずべき価値を増してきているようにも思える。

しかし、それよりも、20世紀において、く言語問題について、もっとも独創的で注目すべき考察をのこしたのは、グラムシである。  
マッテオ・バルトリについて (1)  
 グラムシは、トリノ大学で言語学を専攻していたほどであり、く言語という現象に、ほ

かのマルクス主義者に類を見ないほどの真剣な考察をかたむけた。グラムシによって、く言語問題は、く知識人問題、さらに、かみ独自のくヘゲモニー理論と結びつけられて、思いがけない展望を開くことになった。  
 グラムシが、いかにく言語の問題を重視していたかは、『獄中ノート』の最後期にあたる「ノート29」の主題がく文法であったことからもわかるだろう。そこで、グラムシは、く言語をく社会のメタファーと見、

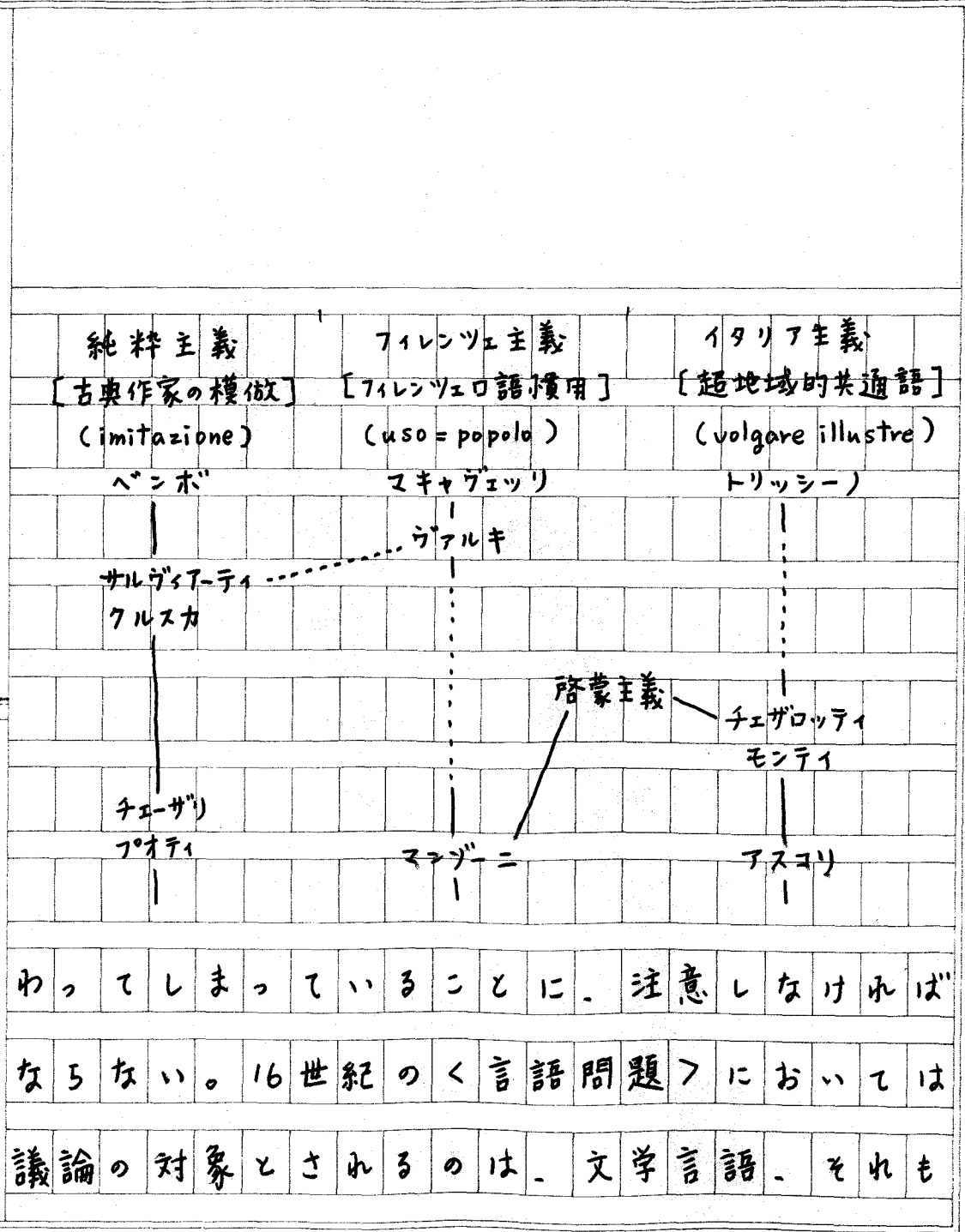
政治権力と言語権力の同型性を明らかにしようとした。そこに浮かびあがってくる対象がく文法<sup>7</sup>だったわけであり、く言語問題<sup>7</sup>であった。グラムシは言っている。「政治闘争のひとつの側面は、『言語問題』とこれまじよばれてきたものであった」「いかなるかたちでにせよ、言語問題があらわれるたびに、つぎのべつの問題が課せられることになる。つまり、指導階級の形成と拡大、指導階級と人民-国民的大衆との緊密で確かな結びつき

を安定させる必要性、ひとことでは言えは、文化的ヘゲモニーの再編成の問題である。」このグラムシの文章は、この論文も書いているさい、いつも頭にあった。しかし、この問題自体<sup>を</sup>論じるのはまたの機会にして、この論文はいちおうここで閉じることにする。

あとがき

言語規範の基準設定という点だけから見る  
 なら、〈言語問題〉は、三つの一貫した系列  
 から構成されると見なしてよい。便宜的に次  
 頁のような図表をつくっておこう。たての列  
 は、影響関係というより、反復される主題系  
 をしめしている。

けれども、そうした連続性はあるながらも  
 言語規範そのものの存在様式が、まったく変



あるジャンルに限られた言語様式の規範につ  
いてだけである。話しことばはもちろん、書  
きことばのほかの領域でさえ、そこでは度外  
視される。ところが、19世紀の「言語問題」  
においては、話しことばの次元までふくめた  
「国民」全体の共通語が、議論の対象となる。  
このことは、決して見すごすことのできな  
い問題をふくんでいる。そこで、それぞれの  
様相を単純化するために、前者から純粹主義  
を、後者からマンゾーニ主義をえらび、それ

らをモデル化して比較してみよう。  
 純粹主義がめざしたのは、文学言語の次元  
 で「古典」のあらゆる規範性を永続化するこ  
 とであり、究極的には、その規範言語が、書  
 物のなかだけに存在することさえ望まれる。  
 それは、意識的に二層言語状態を構築するこ  
 とであり、上位言語は「古典」の「模倣」に  
 よる厳格な規範化の対象となる一方、下位言  
 語は、文化的、文学的価値の全面的な剝奪が  
 おこなわれるが、それ以外の単一化、同質

化の意志はほとんど生まれない。規範からは  
 ずれた多様なことばが、下位言語の「話」の  
 次元に存在することじたいは、この「古典」  
 の体制にとって無関係なものにとどまる。問  
 題は、上/下の階層秩序をうちたて、そのあ  
 いだに、文化的権威にもとづく不可侵の障壁  
 をきづくことにある。この論文で *purismo* を「  
 純化主義」と訳しきれなかつたのは、この理  
 由による。  
 エンジャーニ主義のめざす「国語」の体制は



これとまったくことなる。それは、あらゆる  
 人間が、社会のあらゆる場面で、いつでも単  
 一の言語を話すことを究極的な目的におく。  
 そこでの言語単一主義は、だれもが参予しう  
 る、と言うより参予を強制される社会的伝達  
 の次元において、国家による言語の生産、流  
 通過程の公理化、同質化というかたちをとる  
 その制度的な基礎は、公教育体制があたえる  
 purismo が、全社会領域を対象とする積極的な  
 言語純化運動となるのは、それが「国語」の

体制にくみこまれてからであり、「方言の撲  
 滅」の明確な意志が生まれるのもこの地点か  
 らである。  
 「国語」への意志は、一方では「方言」に  
 対立して、他方では、アカデミー主義的「古  
 典」の体制に対立して生まれる。これは、イ  
 タリアでも、フランスでも、そしてある程度  
 は日本でも同様であった。マンゾーニが、言  
 語における「語」の根源性を見いだしたと同  
 時に、「国語」による言語単一化の方向づけ

を指し示したのは、かれの論理のなかでは矛盾してはいないばかりか、特異な現象でもない。ある意味では、上田万年も、おなじ志向をもっていた。上田が当初から一貫してしりぞけつづけたのは、<sup>過去の</sup>く古典<sup>を</sup>を崇拜し、<sup>文学語</sup>だ

けが言語の<sup>本来の</sup>すがたであるとしりぞいた。旧弊な和学者の態度であった。<sup>こうして、かれは</sup>文学と言語、国

文と国語とを厳格に区別し、より本質的なものは後者であることを説いた。言語とは<sup>本質的に</sup>~~本質的~~

話されるものだという認識が上田にはあった。

(1) 明治文学全集 44. 落合直文、上田万年、芳賀矢一、藤岡作太郎集、筑摩書房 p. 131

(2) <sup>専一的</sup>ibid. p. 134. つまり、二種の言文一致の基礎は、<sup>専一的</sup>「標準語」の使用である。

そして、そのとき言語規範のありかたは一変してしまふ。言語の本質が「話」にあるとすれば、まずなによりも「話」が規範の対象とならねばならない。上田は、「厳格なる意味にて言ふ国語」とは、「言文一途の精神を維持し居る国語」であると言うが、それは、国語が「同時に読み・書き・話し・聞き・する際の唯一機関」となるからである。そして、<sup>(1)</sup><sup>(傍点引用者)</sup> (2)

上田が主導した国語調査委員会では、言文一致体の採用と標準語制定とがくみあわされた

(1) Rapport sur la nécessité et les moyens d'anéantir les patois, et d'universaliser l'usage de la langue française,  
in Oeuvres de l'Abbé Grégoire, t. 2, Paris, 1977, p. 227-254.

かたちで決議事項にもりこまれるのである。

上田についてはこれだけの指摘でとどめる。

重要なのは、く話の次元での言語の単一化

は、近代国民国家の成立と不可分に結びつ

いた論理をもっているということである。

ところで、マンザーニの『言語の統一につ

いての報告』から、ただちに連想がおよぶの

は、フランス革命におけるグレゴワールの『

方言を撲滅する必要性と手段についての報告』  
(1)

である。両者とも、近代国家の誕生直後に

公教育体制をつうじた言語の単一化によって、

同質的国民を形成しようという共通の志向に

よって支えられているという点で、あらゆる

意味で、興味深い比較の対象となるだろう。

しかし、そのあいだには大きなちがいがいく

つかある。それをくわしく検討することは、

ここではできないが、ひとつだけふれておく。

言語単一化の手段として、マンザーニがあげ

るのは、ほぼ学校内での教育措置だけである

のにたいし、グレゴワールは、より広い社会

(1) これは、モンゼニの報告が、文部省管轄の委員会のものだったからではない。  
グレゴワールの報告も、公教育委員会の名のもとに公にされたのである。

(2) *ibid.* p. 243.

的範囲に影響力をおよぼす手段を考えていた  
ことである。それは、「方言の破壊」のため

(1)

の「精神的手段」と名づけられ、そこにはつ  
(*moyens moraux*) (2)

ぎのようなものがある。農村へのフランス語  
による小冊子の配布。その内容は、農業に直

接関係する気象学、物理学から、愛国主義的  
パンフレット、「農民の自己愛をゆりうごか

す」ような物語、小話、対話までにいたる。  
フランス語の歌唱、叙情詩、物語歌の普及。

演劇、芸能における言語統一、地名、道路名

(1) *ibid.* p. 245.

(2) *ibid.* p. 246.

など公共地名のフランス語化、結婚式におけ  
る國語の能力証明の儀式化などがある。グレ

ゴワールは「ジャーナリストは公論の司法官  
である」と言い、「音楽は政治の手のうちに

(1)

属する」と言う。これほど強くばりのきいた  
(2)

指摘をおこなえたのは、グレゴワールが、マ  
ンゼニより注意深かったためではない。こ

のようなまなざしを生まだすことのできる政  
治社会状況が、グレゴワールの背景にはあっ

たということだ。しかし、これらの処置は、

どのような現象としてとらえればよいのだら  
うか。それこそ、グラムシが「ヘゲモニー」  
と呼んだ異様な権力形態のはたらく領域であ  
る。

もちろん、ヘゲモニー装置としてもっとも  
重要なもののひとつが、「学校」であること  
は言うまでもない。しかし、学校が十全な機  
能をはたしうるためには、社会のなかでの学  
校制度の位置づけが明確になされ、学校外で  
の日常生活、社会生活が、補完的、相補的に

教育的機能をおびなくてはならない。これが  
欠けていたのが、19世紀のイタリアの場合で  
あった。

「ヘゲモニー」という概念についての検討  
や分析は、それをするだけの準備も余裕もな  
いのでやめておく。いちおうの定式で言うな  
ら、ディクタトゥーラが公的領域において、  
(dittatura)  
政治的、法的強制力による支配を生みだすな  
ら、ヘゲモニーは、私的領域において、文化  
(egemonia)  
教育にもとづく自発的同意と指導を生みだす。

注意すべきは、ヘゲモニーは、まえもって存  
 在する同意によって支えられるのではなく、  
 ヘゲモニーという権力じたいが、自発的同意  
 をつくりだすことによって作用するというこ  
 とである。さらに、強制と同意は、相補的ニ  
 項対立としてではなく、相互変換形態として  
 とらえねばならないだろう。そうした留保を  
 つけたとしても、つぎのことは言えると思う。  
 ヘゲモニーは、社会のある領域に局在はしな  
 いし、特定の何者かの手のうちにある意のま

まになる道具ではない。それは社会空間と完  
 全に同型的な回路系を設定し、そのなかに諸  
 個人を権力行使の主体として配置づける。そ  
 のとき、ヘゲモニーは、内面化され自然化さ  
 れた制度をつくりだす(げんみつに言えば、  
 ヘゲモニーによって<内面>、<自然>が  
 つくりだされる)。

とするならば、近代国民国家が、<話>の  
 次元をもふくむ全体的言語単一化をめざすの  
 は、<言語>そのものをヘゲモニーの媒体で

あると同時に表現につくりあげるためである。  
 社会全域をおおう網の目をつくることができ  
 るのが言語なら、どんなに日常的で微細な空  
 間にも入りこめるのは、これまた言語である  
 から。こうして、話手集団の生活世界そのも  
 のが同質化されるにいたるだろう。く国語フ  
 の体制の完成態は、そのようなものとなるだ  
 ろう。  
 ある意味では、マンザーニ主義ほど、この  
 過程の局面を意図的に提示したものはない。

けれども、マンザーニ主義は、少く時代錯誤  
 の感すらいだかせるあまりのフィレンツェ中  
 心主義をとり、しかも、その手段が辞書もつ  
 うじたく言語のおきかえフであるという理論  
 的弱点をもっていたし、イタリアの政治社会  
 状況じたいが、「厳格なる意味にて言ふ国語」  
 をつくりだせる能力をもっていなかった。現  
 在でも、イタリアでは、フランスや日本にお  
 けるようなく国語フの体制は成立していない。  
 だが、このことはつぎのことをも意味する。

(1) ある意味で、ハーバーマスのモデルは、この延長線上にある。

アスヨリ理論は、マンゾーニ主義批判として  
 は有効であったが、そのあまりに近代主義的  
 図式にもとづく「自発的合意」の契機は、  
 国語の体制における抵抗手段としては、限  
 界があるということだ。それは、政治社会に  
 対立する自由な市民社会<sup>の幻想</sup>という古い二元論へ  
 のまっもどりともなりかぬない。「合意」  
 同意「それじたいを目的化することは、支配  
 的ヘゲモニーの追認になりかぬないのである。  
 (1) しかし、このことを論じつづけると、  
 くあ

とがき「の範囲を超えてしまうので、この辺  
 でやめておこう。結論めいたものは、だした  
 くない。